

新刊紹介

田中亮平著

『時を超えた詩心の共鳴—ゲーテと池田大作—』

牛 田 伸 一

本書は、著者である田中亮平教授（創価大学文学部、以下、著者と表記する）が「数年にわたって担当した創価大学での講義」（1頁）をまとめられ、第三文明社の創価教育新書シリーズの一つとして出版されました。「創価大学での講義」とは、紹介者の見聞きすることによって推察すれば、著者が専門とするドイツ文学、とりわけヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（以下、ゲーテと表記する）の世界の入口へと、学生を道案内し続けてきた授業のことを指していると思われる。その限りで本書は、著者自身も述べていることですが、「ゲーテの生涯を概括的に紹介」（3頁）した、ゲーテ思想の案内書という横顔があります。

本書の横顔のもう一方には、創価大学創立者の思想の内実をゲーテとの対比から取り出そうとする意味で、池田大作研究の人物論的な「端緒」があります。ここで、「端緒」と表現したのは、理由がないわけではありません。著者が告白するように、まさにこの研究手法は「未開拓の分野」（3頁）と言ってよいと、紹介者にも思えるからです。それを踏まえ、著者は自分の仕事を「ささやかな試み」に過ぎないと語るのですが（ここに研究に対する著者の誠実な人柄を感じ取ることができるでしょう）、本書は実際のところ、池田大作研究の新たな地平を切り開く「挑戦的な試み」の一つだと言い換えることができるのかもしれませんが。

さて、ゲーテの専門家が書いた入門書に対して、浅学菲才の門外漢は語る言葉を持ち得ませんし、池田大作研究の学問的方法論を議論できるだけの素養の欠片もこの木偶の坊には、残念ですが（本当に）ありません。それでも何かできることはないかと苦心したすえに、「これならできる」と思ったのが、読者の一人として印象深かったことを紹介することです。それはおよそ次の三つにまとめることができます。

ゲーテに限ったことではないのですが、思想界の巨人の生涯を紹介する際には、「間違い」とまでは言えないにしても、そこには多少の誇張が付きものです。しかし、本書にはそうした脚色がまったくと言っていいほどないのです。これが印象深かったことの一つです。

たとえば、第一章（ゲーテの生涯と作品）の終わりに、ゲーテの臨終の言葉が紹介されています。一般的には「もっと光を！」に耳目が集められるのですが、「寝室の窓のよろい戸を開けておくれ、もっと光ははいるように」が最後の言葉であったと冷静に紹介されています。その他、紹介者があえて乱暴な言い方をすれば、多忙な政務をほっぽり出してイタリアに旅立ち、そこで詩

人としての自分を再生させたいと願ったり、夢だった芸術家の道の一步を踏み出そうとしたり、あるいはまた、恋多き彼の若々しさが、豊かな創作活動の大きな原動力の一つになっていたり、ゲーテという思想界の巨人の誇張なき「人間らしさ」を本書から読み取ることができます。

予定調和的な偉大さの連呼など不必要で、そうした「(いまある)人間らしさ」の揺れが、「(あるべき)人間らしさ」、つまり本書でいうところの「人間性(ヒューマニズム)」への昇華を遂げることに、豊かな生き方の試金石があるのではないか。ゲーテの生涯を通して、そうした思いを強くさせてもらいました。

印象深かった二つ目は、著者が第三章(ヒューマニズムの復権を目指して)の中で、「人間性」の矛盾を指摘している箇所にあります。ゲーテとヘルダーは、紹介者の専門分野から眺めると、この矛盾を近代教育のモードを導入することで回避していた、ということが理解できました。これは紹介者にとっては、浅学ゆえのことなのですが、少なからぬ驚きを感じずにはいられませんでした。

ゲーテの「人間性」概念には、著者によると、「自己超克」と「他者への寛容や援助」の二つが挙げられていますが、これらは矛盾するとのこと。言われてみればその通りで、「一方では屹立した人格の確立を目標としながら、他方ではその不可能性をも前提とする」(149頁)ことになるからです。相容れない意味内容が「人間性」の概念に含み込まれている事態にどう対処するか。その矛盾は、存在(「いまある」人間らしさ)から規範(「あるべき」人間らしさ)へという、時間差を挿入することで回避されるわけです。この時間差の間を取り持つのが、言わずと知れた「教育」のはたらきかけです。すなわち、「人間性」の陶冶可能性(Bildungsmöglichkeit)という媒体を持ちだすのです。屹立した人格と援助、カントの言葉で言い換えれば、自由と強制は、弁証法的な関係にあります。それを著者は「一種の先送り」(152頁)という表現をしています。これには反論の余地はなく、それでも教育にたずさわる者としては、「そこに踏みとどまることしかできないなあ」との、何とも言えない思いが残りました。

あくまで個人的な考えですが、本書の読みどころの一つは、第三章にあると思います。「人間性」をめぐるゲーテと創立者の間を、著者は次のようにまとめていますので、紹介しておきます。「ゲーテを西欧ヒューマニズムの伝統の頂点の一つとすれば、池田は東洋仏教の知見を出発点としながら、西欧ヒューマニズムの遺産を取り入れ、『自律』と『共生』という固有の原理を打ち立てる。そこを足掛かりに『人間性の連帯』の可能性を求め、ヒューマニズムの復権をめざしているのである」(171頁)。

「人間性」は、「いまある」と「あるべき」の間の弁証法的緊張の真っ只中からの昇華にある。これを思い起こすとき、若き池田青年は、ゲーテの詩という陶冶財(Bildungsgüter)を媒体に、「ある」と「あるべき」の絶えざる接近を試みていたことを感じ取ることができました。これが印象深かったことの最後です。

著者は、池田青年の「読書ノート」に刻まれたゲーテの詩の抜書きから、次のような解釈をしています。

価値観の転倒した終戦直後の世相の中にあつて、健康ではない体で一家の生計を背負って働きつつ、一方では向学の志やみがたく夜学に通い、なけなしの小遣いで書物を求め読んだのがこの時代の池田青年であった。／貧しい中にも人格の練磨を求めてやまない池田青年に老ゲーテの『地上の子の最高の幸福は／人格だけである』との言葉が感銘を与えたこと。……。そして終戦直後の人心の荒れ果てた世相に流されることなく、真摯に誠実に苦闘の中に身をおいていた一人の夜学生に『暑さ寒さに苦しんだものでなければ／人間の値打ちなんてわかりようがない』の一句が共感を生んだこと。……。／……読み手の池田青年も苦闘時代のただ中でゲーテの詩に出会い、それを自らの体験としていった。／……若き池田青年における読書は、人間の存在の意義を求める探求であり、読書のための読書ではなく、それを通じて『人格』を形成すること、すなわち『生きること』そのものであつた。(傍点は引用者による、86-88頁)

いまある存在を、陶冶財を媒体にして、あるべき存在に高めること。そうした高まりの人格内の沈殿物が「教養 (Bildung)」であり、そこにたどり着こうとする間断なき過程が「陶冶 (Bildung)」です。それゆえ、いまある現実を受け入れつつも、それにあきらめず高みを目指し、価値ある内容を血肉化する営みをどのように構想するかに、「教育」のはたらきかけの眼目があることに気づかされます。

そうした規範的な「人間性」を目の前にして、臆病に怯む「わたし」がいることを、どうやっても隠し切れません。しかし、そうしたありのままの自己を受け入れつつも、前に進もうとする構えを忘れないこと、そしてそのためにこそ学ぶという営みがあるのだということを、本書の第二章 (詩人の魂の出会い) は教えてくれています。

本書を手にする読者が、これを陶冶財として受容・消化し、人格の一部にできることを念願せずにはられません。

(第三文明社、2009年)